

特集

国際協同組合年なう。 「協同組合の 10 年」を見据えて

失望の声も聞かれる。こんなものだ
と思っていたという、あきらめの声も
ある。2012 年、すなわち国連総会が
定めた「国際協同組合年」がまもなく
暮れようとしている。しかし、生協を
はじめ日本の協同組合陣営は、達成感
には程遠い状況にあるというのが率直
なところだろう。

この 1 年で協同組合に対する世間の
理解が少しでも進んだだろうか。自分
たちの運動のなかに若い世代を積極的
に呼び込むことに、日本のどこかの協
同組合が成功しただろうか。もっと何
かできなかったのだろうか。なぜ何も
できなかったのだろうか。そんな思い
ばかりが募るのである。

目前の業務に追われる現場からは、
所詮は他人事、東京で偉いさん達が何
か建て前を言っているだけでしょ、何
もやらないわけにはいかないから形だ
け儀式を開いて終わりですよ、と素っ
気ない反応も返ってくる国際年だが、

ちょっと待ってほしい。

それでも、何か得られたものはあっ
たのではないか。地域に何かが芽生え
た例だって、探せばきっとあるはずだ。
また、思うようにいかなかったとして
も、それがあらためて確認できただけ
でも半歩前進と言えるのではないか。

何より、国際年はまだ終わっていない
のである。そして年が明けても、来
年からの 10 年を「協同組合の 10 年」
とすることを国際協同組合同盟 (ICA)
は宣言している。

だからわれわれは、誰にも通じない
ような、建て前の、お仕着せの言葉で
はなく、若者にも通じる言葉で、今こ
の時期にあえて言おう。「国際協同組
合年なう。」協同組合の年は、これか
らである。

杉本貴志 (関西大学教授)